

エジプトにおける綿作集団化の実験

- I ナワグ：土地所有の零細化問題を解決する革命政府の実験成功（翻訳）
Nawâg; nagaḥat tagribat al thawrat fi ḥalli mushkilat al milkiyat
- II 小規模農地所有を集団化＝交換分合する実験にかんする最初の所説（翻訳）
awwal taqrîr 'an tagribat tagmiy'i al milkiyât al zirâ'iyat al sa'giyrat

まえがき

UAR大統領府より出版されている月刊誌、「^{ビナーウ・ワタニ}国家建設 (binâ'u el watani)」1960年12月号所収の「ナワグ」およびアクバル・ル・ヨーム紙1961年5月6日号所収のサイエッド・ソンボル論文の2篇を全訳紹介する。この2篇の論文のテーマは、ナワグ村にはじまった耕作集団化＝交換分合の実験である。これについては、国連の経済・社会委員会の *Progress in Land Reform, 3rd Report, April 1962*。でもとりあげられている（71ページ、73ページ、122ページ、123ページ）。

全文を訳出紹介する理由は、農地改革によって農地の再分配が行なわれなかったいわゆる農地改革の外にある村での重要な改革の極め手として、ナワグ村の実験が主張されていることである。この実験については、マハムード・ファウジの2つの報告書がある。Mahmoud Fawzi, *Nawâg: A Pilot Experiment for solving the Problem of Fragmentation in Egypt*. 1958. Ministry of Agrarian Reform. マハムード・ファウジ, ナワグ：輪作集団化＝交換分合の最初の実験, 農地改革省 1960. (Mahmūd Fawzi, *Nawâg—awwal tagribat li tagmiy'i al dawat al zirâ'iyat*. 農地改革省, 1960.)

なおM・ファウジは、現在農業協同組合庁長官である。なおまた翻訳にあたって、カイロ・アメリカ大学東洋研究アラビア語主任講師モリス・ブートロス・サリーブ氏に校閲していただいた。もし訳文が正確なものであれば、いつに M. B. Şalib 氏のおかげである。なお訳文中〔 〕内は訳者が挿入した部分である。（1961年1月訳「ナワグ」、1961年5月訳「ソンボル論文」、1962年7月加筆）

I ナワグ『土地所有の零細化問題を解決する革命政府の実験成功』

輪作の集団化制度を採用後、農業生産が30%増大。

1959年のナワグ村におけるフェッダーン当たりの綿花生産は1956年の62エジプト・ポンドにたいして155エジプト・ポンドになる。

ナワグ村の実験を〔全国に〕実施すれば灌漑用水の節約は、250万フェッダーンの新しい土地を耕作するのに充分である。

農地所有の集団化は土地所有の権利よりも労力の権利に重要性を与えることを意味する。

零細化された土地所有を集団化する制度は、農業の機械化、生産費の低減、農業における早期栽培、土地肥沃度の増大に役立った。(註1)

ガルビーア県の村の1つ、ナワグ村において実現された奇蹟は、農業生産が当面しているもっとも困難な問題を解決すべき勝利への道を農民のために描いてみせたのち、アラブ共和国全農民の希望となった。

共和国のその他の村に住む農民はナワグ村の実験の重要性とその成功を認めたのち、かれらの村においてもこの実験を実施することを要求して農地改革省に手紙を書いた(註2)。

(A) 全耕地の85%が零細化された土地所有である
それならば……ナワグ村の実験とは何であるか？…
…それはいかにして始まったか？……その成果は何であるか？

ナワグ村の実験こそは、たえずわれわれに脅威を与えてきた困難な問題の実際的な解決策としてあらわれた。その問題とは、農地所有が小規模零細な単位に細分

化することによって、われわれの農業生産が年々、低下したことである。それは南部州の耕地の85%をおおっている零細化が、健全な実用的・技術的・経済的な方法での土地耕作を妨げ、その結果土地の肥沃度を失わせ、病害虫が土地の生産性を破壊するのを助長しているからである。

(B) 納得が第一

われわれはある解決策をもって零細化問題に立ち向ったが、それは偶然得られたものではなく、農地改革省の人々によって行なわれた長期の調査研究の結果として得られたものある(註3)。三圃輪作制度によって耕作される大土地所有の形で「大規模な経営の集団化と表現すべきであろう」零細化された農地所有を集団化する制度の採用が決定されたとき、われわれは幾多の考慮をはらったのであるが、そのもっとも重要なものは、この問題は土地自体に関係する以前に農地・土地所有者に関係しているからであるから、その採用は土地所有者の納得のうで遂行されなければならないということである。というのはその採用は、土地所有者の意志とかれらが耕作する土地の処分にもとづく問題であるからである——ちょうどその制度が、実施にあたって能動的な協力者に基つて遂行されるものであるように。

(C) 土地の集団化……所有権を保留しつつ

この故にまた「農作輪作に基づく耕作の集団化」は、相続、売却の方法について土地所有制度に干渉したのではなく、その土地にたいする個人の所有権を留保した。

それと同時に大土地所有にみられる利点を享受できる大きな耕作単位で、所有・経営が零細化された土地の集団化を行なった。そのもっとも重要なものは広範囲にわたる農業機械の使用、土手によって浪費されている地域の減少、隣接の作物にとって有害な作物を耕作することの防止、病害虫とのたたかい、そして生産を増大するための全般的制度の設置である。

(D) 輪作による耕作の集団化

南部州が農業において三圃輪作制度にしたがっていることは周知のとおりである。この輪作において耕作を集団化することは、全部あるいは半分だけ、あるいは3分の1だけ、同一の生産物でホード(註4)を耕作することを意味する。たとえばホード(I)を綿花で耕作し、ホード(II)を小麦で、ホード(III)をベルシム〔エジプト・クローバー〕で耕作して行くが、面積においてほとんど等しい〔ホードの〕土地〔が輪作される場合、こ〕の3つ〔の輪作〕は、システマタイズド・ローテーションと名

づけられる。

もしたとえばホード(I)にたいして、農地保有者の数が100であるとする、かれらの大部分は、自分の土地で綿花を耕作することができないであろう。というのは法律がこたを禁止しており、またかれらが麦、トウモロコシ、ベルシムを欲するからである。〔ここではホード(I)にこれら農民の所有地のすべてが存在する仮定をとっている〕。しかし耕作の集団化制度は、〔村の〕すべてのホードに農民のすべてが所有地をもつように、交換もしくは相互交換する仕事を促進している。ナワグの実験においては、協同組合が農民の間で農地交換する仕事、つまり相互交換の仕事の組織化を行なった。どの農民も自分自身でかれらの土地の耕作を行ない、かれに属する土地の生産物を完全にうることになった。

(E) 耕作を容易にすることと生産の上昇

農耕集団化のもっともすぐれた諸利点、それはまず大きな地域に科学的耕作方法を適用する可能性である。その結果として、病害虫への対抗と施肥の容易化が実現される。さらに適正なスケジュールでの農業機械の使用と健全な科学的方法による耕作実施の作業が可能となることである。

(F) 農耕の機械化および生産物のマーケティングを容易にすること

集団化制度はまた農業における機械化農具の使用に役立つ。それは生産コストの引下げと耕作実施期間の短縮〔播種までの耕作時間の短縮〕に結果する。そしてこのことから早期栽培と土地肥沃度の増大が生ずる。これに加え、採集と刈入れの活動が早められること、農作物の質の改良、農産物を協同的に〔協同組合を通じて〕高い価格で市場に出すことが容易になること……が実現されているのである。

(G) 新たな250万フェッタン

しかしもっとも重要なものは、耕作集団化の採用を一般化することによって実現されるもの、つまり隣人の日付とちがった日付で小土地を灌漑する農民をすべてそのままに放置する結果、失われている水の節約である。灌漑用水の節約はナワグの実験が〔全国的に〕採用されたとき、南部州の全灌漑に使用される水の約30%だけ可能となる。それは250万フェッタンをこえる新しい土地を耕作するのに充分である。

(H) 農業生産が30%増大

またナワグの実験によってたしかめられたことは、農業生産が約30%以上も上昇したことである。すなわ

ち、もしナワグの実験を零細化されている農地のすべてに適用するならば、われわれの総農業生産の上昇を、この比率と同じだけ可能にすることである。これは200万フェッダンを農地に追加することに等しい。

(I) 幾多の利点

幾多の利点とは、集団化制度が実現する他の利点に加えて、とくに小所有者、小作人にたいする農業クレジットの拡大、充分な量の選定された種子、種イモおよび肥料を農地で使用する保証および融資資金回収の容易化のようなものである。たとえば集団統一化された100フェッダンの綿花栽培地の〔融資側からの〕監督には少数の監視人が必要であるにすぎないが、もし村のジマーム〔耕地〕に200にもわかれて農地がちらばっていると、その反対になるという事情によって、〔集団化された場合〕融資者側はその資金〔の回収〕について確信できるであろう(注5)。

この制度はまた、小麦や綿花のような農法の施行に役立っている。また隣接の農作物にたいするある種の農作物の悪影響を防止するのにも役立っている。というのは綿花作付地域に隣接した小地域でベルシームを耕作すると、害虫がたえず綿花に移って行くので綿花に大きな被害を与えるからである。

一口にいえば、集団化〔=交換分合〕の利点はまさに限りがない。それは農民の生活とかれらの土地におけるすべての事柄に大小をとわず、むすびついているからである。

(J) この実験はいかにしてナワグ村で始まったか？

しかしどう理由でナワグ村がこの実験の出発点にえらばれたか？

農地改革省協同組局長〔現在農業協同組合庁長官〕マハムード・ファウジはこの質問に答えている……

第1にナワグ村の農地所有が極端なまでに零細化しているためにえらばれた。ナワグ村では1585名の所有者が1754フェッダンを所有している。これは村の〔耕地の全ての〕面積である。1フェッダン未満の所有者の比率は約87%に達している(注6)。ナワグ村はまた農地輪作の集団化制度の採用によって生産のいちじるしい増大が実現できる未来像を明瞭にえがいてくれるためにえらばれた。

第2に、ナワグ村の農民は農地改革村の農民でないというのでえらばれた。輪作集団化制度の基本的な法則はそれが自由意志にもとづいて、納得の上で実施される

べきであるということである。われわれは、この実験を農地改革村の1つにおいて採用することをおそれた。それはこの実験が農地改革が行なう特別な方式のおかげで実行されたといわれるからである。この実験を成功せしめ農民にその利点を納得させるためには、この実験の採用が他のいかなる強制からも自由な所有者の農地において着手されなければならない。

(K) 実験の採用

この実験の実施は1955年〔11月〕、金曜日の礼拝後、ナワグ村の住民をダッワール・ル・オムダ(注7)における総会に召集することによってはじまった。この総会は協同組合が与えたサービスの利点を——それは農地改革〔村〕協同組合において実施されているものと同様のものであるが——享受するために、農民が協同組合への加入に関心をもつようにするためのものであった。協同組合が肥料の配布を信用貸と公定価格によって行ない、綿花種子の分配を公定価格で行なうことを知るや否や、農民はただちに協同組合に加入した(注8)。

農民が協同組合に結集し、協同組合がもたらすサービスの重要性を認識したのち、第2段階が農民集会の開催によってはじまった。その集会に、綿花害虫にたいする駆除薬の問題がもちこまれた。小所有者・保有者(注9)はヤミ市から不良不純農薬を入手するのをつねとしていたからである。この集会で農民にたいしてこういう説明が行なわれた。——毒物である農薬を分散した小地域で使用すると、子供・家畜・家禽におよぼす事故についてはいまでもなく、よい結果を生まないであろう。さらに、綿花栽培地の合理的な集団化が可能となれば、その場合には化学薬品による綿花病害虫との闘いが可能となり成功するであろう。——

農民がこのことについて納得したのち、協同組合集会がひらかれ、生産を増大するための輪作制度集団化の採用と、ナワグ村に適した三圃輪作制の組織化のために農地改革省に請願を送ることを決定した。

(L) 実験の結果

輪作制度と耕作経営の集団化を組織したのち、この制度の重要性についての農民の確信が増大した。集団統一化された耕作のもとにあるホードの面積は、いまでは50フェッダンを下ることはない。〔ふつう〕ホードでは120名以上の所有・保有者が耕作している。たとえば、ホードツナートゥール(注10)は87フェッダンの綿花栽培区であるが150名の所有者によって所有されている。ホード・ルル・バルダー(注10)は75フェッダンで120名の保有者が

耕作している。

(M) フェッダン当たり綿花生産は155エジプト・ポンド

その結果がナワグ村における土地の生産性向上である。それは〔農民の〕自尊心をよびおこす仕方で行なわれた。1956年には〔1フェッダン当たり綿花収量は〕4.3カンタールでその生産高は62エジプト・ポンドであったのにたいし、本年度は、1フェッダンが9カンタールの綿花を生産し、その豊かな生産高は155エジプト・ポンドである。ちなみに農業経費は25エジプト・ポンドであった(註11)。ナワグ村のある部分では、フェッダン当たり12カンタールに達した。この制度はガルビーア県の村がいままで記録したことのない数字である。そのうえに協同組合の販売〔の方式〕によって農作物が高い価格で売却された。農民が仲買人や高利貸に青田売りで農作物を売るように余儀なくされることがなくなったからである。綿花の他に、小麦のフェッダン当たり生産は、12アルデブ〔1アルデブ=150kg〕に達し、米についてはモミ4ダリーバ〔1ダリーバ=945キロ〕、フェッダン当たりベルシームの生産は昨年度20%の増加を記録した。

(N) 経済的社会的発展

ナワグ村における輪作集団化の実験は他の勝利をも記録した。市場取引の好況と復興の兆が完全に村をおおい始めた。フェッダン当たり農地価格は1956年には560エジプト・ポンドであったが、昨年度には800エジプト・ポンドまで上った。同様にメッカ巡礼の数はふえ、昨年度4人であったのにたいし、10人になった。また本年度には150名がラジオを買った。婚礼披露宴は5割方増加し、家畜の数は20%方増加した。

ナワグ村が生んだ新しい事実は、農地の集団統一化が農民の統一と連帯性を生みだしたことである。これによって牛が他人の畑を荒したり、水争いをしたり、またお互に泥棒したと非難しあったり、綿花のぬすみ摘みをするようなさまざまな争いがごとが終りをつげた。同様に泥棒騒動や発砲騒動も少なくなった(註12)。

(O) まず労働の権利……つぎに所有の権利

輪作において耕作を集団化する制度は、労働の権利が所有の権利にまさる——もちろん所有の権利を犯すことはしないが——ことを意味する。わが社会主義的・民主主義的・協同組合的の革命は所有の権利を神聖化することはない。わが革命政府は人民を第1に何にもまして尊重する。この故に、労働はわが社会主義制度において第

1の地位をしめているのである。

(P) 矛盾の社会主義的解決

ナワグ村の実験は、わがアラブ社会主義の眞の勝利であると考えられる。それはこの実験が大規模土地〔所有〕のもつ大規模な生産活動と多数の農民への所有の分配にもとづく社会主義との間のたえざる矛盾を解決することができるからである(註13)。

わがアラブ社会主義の敵は、所有の制限と農民への土地分配の原理を攻撃するのをつねとしている。この原理が土地を零細規模に細分割し、さらに生産の増大ではなく、生産の低下をもたらしていると非難している。しかし革命政府は、土地分配にあたって、土地の零細化の危険から生産をまもることを第1に重要なことからであると定めた。これは協同組合の創設でもって行なわれ、輪作の集団化制度の採用によって促進されている。

(Q) アラブ社会主義の勝利

ナワグ村におけるわれわれの社会主義的実験は、資本主義がするように生産向上という名の祭壇に小規模所有者という犠牲を捧げはしなかった。それはまた共産主義制度のもとで起こったように、農民の権利と自由を奪って、農民をコミュンに駆りたてることもしなかった。この実験は農民の自由を保証しつつ、生産向上を実現するように作用している。この実験は、国民の70%が生計をたてている農業部門におけるわが社会主義の最も重大な勝利である。

II サイエッド・ソンボル(註14)『小規模農地所有を集団化=交換分合する実験にかんする最初の所説』

(アクバル・ル・ヨーム紙、1961年5月6日号所取。)

農村の住民は小規模農地所有の集団化の計画とその健全かつ経済的な耕作についていまなお議論をつづけており、この計画において実施されるものは果たして何であるかについて疑っている。

この計画をめぐる論争は3カ月前に起こった。当時わたくしは農業相兼農地改革相サイエッド・マライ氏と会談したが、その会談はこの計画の採用によって農家の心底にわきおこった危惧感についてであった(註15)。マライ氏はその危惧を否定し、この計画は土地所有に全然影響を与えないものでなく、健全かつ経済的な経営〔=耕作〕によって小規模農地所有の経営を行い、その結果小土地所有の生産を増大せしめることを目的とするものである

と言明した。

昨日わたくしはサイエッド・マライ氏に会い、この計画およびその実施のためにとられるべき諸段階について質した。わたくしはこの感動的な実験にかんする最初の完全な所説を聞くことができた。

農相兼農地改革相はいう……この計画は土地所有者および土地保有者の自由に干渉するものとみなされたので、最初は疑心暗鬼をもって迎えられた。中傷や流言がばらまかれた。これにたいする実際的な回答はこうだった——つまり、本庁から強制したり、農家の問題に干渉したりしないで、この計画の利点を説明するだけにとどめたくて、本庁はこの計画の実施を農家の自由意志にゆだねた。その重要点は以下の諸点に要約できる。

(A) 農地の集団化

(i) 小農地を大きな単位を集合することにより、農地所有者・保有者は最新のシステムにもとづいて農地を耕作することができる。そのシステムとは機械化された農具を耕作に用い、ホードを同じレベルにならすことである。

(ii) ホードごとに、特定の時期に耕作を行なうことが可能になれば、耕作や灌漑の時期を各所有者ごとに進ませたり遅らせたりすることから生ずる損害をさけることができるし、またその結果として畑から畑へ病害虫がひろまるのをさけることができる。

(B) 灌漑用水

(i) 1つのホードのなかで〔同一作物の〕作付地域が分散されたためにいままで無駄にされてきた大量の灌漑用水を節約することにより、その水を新しい地域の灌漑に利用できる。それは、この計画の実施によって、とくに農地の間に散在する未耕荒地が必要とする灌漑用水の大部分を充たすことができるようになるからである。

(ii) 土地の肥沃度を回復する、ベルシームやファール〔そら豆〕のような土地の肥沃度を消費させない作物を耕作する特定の時期がそれぞれのホードにおいておかれるように各村のホードの間に輪作制度を組織する。

(C) 農業法の施行

(i) 農業法の幅のある施行、たとえば綿花栽培地の制限、冬作物につづく綿花というように特定の作物のあとに特定の作物をつづいて耕作することの禁止、もしくは作物のために一定期間綿作を禁止すること等々。これに加えて、生産増大を意図する諸法令。

(ii) さらに重要なことは、集団化制度にくみこまれてい

る。その農耕単位において農民は幾多の農業上の困難を克服するであろう。ついで互に隣りあった場所で異なった作物を耕作することによる悪影響を回避することである。同様に、現在われわれが見ているようにミサークやバトゥーン(注16)の形で農地が無駄使いされているが、その無駄使いが必ず無くなるような方法で、この計画はおそかれ早かれ村のホードを再構成するにいたるのである。

(D) 所有の零細化

サイエッド・マライ氏はつづけていう……これらの利点のすべてが農耕を組織化する計画への唯一の原動力ではない。われわれは農業社会がわれわれに課しているさしせまった必要から計画の施行をせまられたのである。農地の零細化ははかりしれない程になっている。昨年センサスによれば農地の1人当たり平均所有面積は数ヘクタールをこえていない。ビヘイラ〔バハヒラ〕県では10ヘクタール、メヌーフィア県では6ヘクタールとなっている。

(E) 公開の議論

この計画の施行に当たってとられた手段は現在農業においてとられているシステムと集団化のシステム——それはこの計画の採用の結果として生ずる利点を説明する線と提案されている——との間に公開の比較論的な議論を行なうことである。その結果〔農民の間に〕納得する気配があらわれたならば、農民は綿花栽培地の交換分合の基礎を各ホードに設定するため、本庁に輪作組織化の要求を提出することになる。

(F) 実験の開始

最初、1961/61農業年度において、この実験は100村をみたくすることになると考えられていた。その結果、それらの村が来るべき10年間に達成されるべきものの中核となると考えられていた。10カ年はこの計画を実現するために定められた期間である。最終的にはメヌーフィア、カルユービーア、シャルキーア、ガルビーア、ダカハリア、ミニアの諸県に散在する103カ村をこの新しい実験のためにえらび出すことが決定された。このうち65カ村がメヌーフィア県に属しているが、メヌーフィア県の村の総数は320カ村である。

(G) バターヌーン村

大臣は話をつづけた。……メヌーフィア県は、住民の密集している県の1つとみなされているが、それは住民の数が134万7000に達しているからであり、同様に土地所有者・保有者の数は15万1611に達している。各所有

が4.8人を養っていることになる。したがって農業人口当たり所有面積は12キーラートにすぎない。

バターヌーン村はメヌーフィア県の村の1つであるが、南部州〔エジプト〕の数多くの村における零細化の結果を示す明瞭なモデルと考えられる。というのは〔平均〕所有〔面積〕は9キーラートであり、実ある農耕がこのような場合に実現されることは不可能である。同様にたとえよい種子、適当な肥料、適当な灌漑、排水路の整備のために何事がなされたにしても、零細化の問題が現実と事実のまえにたつて処理されないならば、政府にとっても生産をあげることは不可能となる。

(H) 村における集団化=交換分合

バターヌーン村の土地所有・保有者数は1125名でその大部分は1フェッダーン未満の土地を耕作している。この〔1フェッダーン未満所有の〕数は1908、所有総数は2165である。総数の残りについていえば、その数は257でそのうち207は1フェッダーンと若干〔=1~2フェッダーン〕である。さらにその残りについていえば、その数50で2~5フェッダーン〔の面積〕を上下している〔注17〕。

この所有・分布のサンプルはメヌーフィア県の他の村にもひろまっている現象である。さて集団化はこの村において何をなしたとげたか？ 昨年度の339〔の零細化した綿花作付単位数〕〔注18〕の代りに、〔本年度は〕1125名の所有・保有者が1177フェッダーンの綿花栽培地を52単位で耕作し、これによって生産の増大が促進された。

(I) 〔零細化の〕欠陥を回避すること

以上が集団化=交換分合の哲学であり、この計画の意味するものであり、またこの計画の施行によって〔メヌーフィア県の〕65カ村において遂行されたものである。これらの村は農地の零細化によってもたらされる欠陥をさけるための計画の手始めとして、今年選定された村である。この計画はその実施にあたって全く自由意志による仕方によったのであるが、最初集団化される綿花栽培地の単位面積は20フェッダーンを下らざることが結論されていた。ある村々の農耕単位面積はバターヌーン村にみられるように3~4フェッダーンという小単位であり、その反面、他の村々では50フェッダーンの大きさであった〔注19〕。

(J) 成功の拡大

わたくしは大臣にたずねた……この実験の成功の拡大はどうか？

かれは答えた……この県の村々にあらわれた成功の最

初の兆はこう予示している——本年度経過したのと全く同じ方法で設定されたプランに従って来るべき9カ年のうちに徐々に集団化が行なわれると。もし協同組合のメンバーの監督の下にメヌーフィア65カ村において集団化が遂行されるならば、この県の農民の間に新しい意識があらわれ、集団化村の外にある他の村々も積極的にその影響にたいする反応があらわれるであろう。全く自分自身の意志に基づいて、これらの村々で行なわれたことがらを享受したいという希望があらわれるであろう。例をあげるとタラー郡の2つの村タブルハー村とサマーリグ村がそれである。

(K) 実験と生産

わたくしはいった……この計画の影響は生産物の生産〔増大〕においてあらわれたか？

大臣はいった……それはこの実験の新しさのために未だあらわれていない。生産物〔増大〕はあらわれていない〔注20〕。しかし私は確信している——新しいシステムを採用する村はその生産を増大するであろうと。われわれのまえには生きた実験がある。れたはこのシステムを採用した最初の村、ナワグ村である。実験採用以前のフェッダーン当たり生産高は綿花4.3カンタールであったが、現在8.5カンタールとなった。これはほとんど2倍である。ナワグ村で起こったことは、このシステムを採用する村にも起こるであろう。

サイエッド・マライ氏はその談話を次のように結んだ……これはわれわれが実施をはじめた新しい実験の物語である。それは努力・忍耐そして説得を必要とする実験である。わたくしは確信している——村々の農家はこの実験の採用に向って進むであろうと。それはかれらが、この実験の採用がかれらの利益となり、またかれらの祖国の利益となると完全に確信しているからである。

〔注1〕 tagmiy'u という語は、grouping あるいは consolidation と訳される。ナワグの実験は、農地の交換分合、生産物の交換をふくみながら同時に部分的な耕作の集団化を内容としているので、集団化=交換分合と表現してみた。

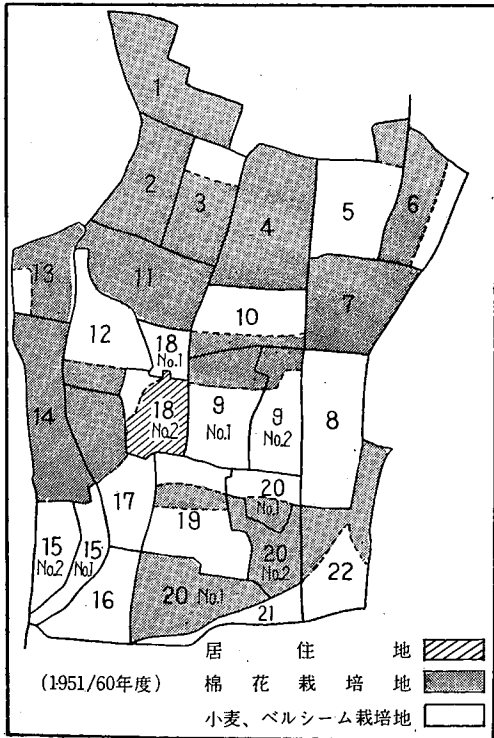
〔注2〕 いち早く、ナワグ村の実験を採用したのは、メヌーフィア県のジャタヌーフ村、ミート・シハラ村、ミンシャート・スルターン村、シェーフ村の4カ村で、現在ではソンボル論文にあるように103村に及んでいる。

訳者がナワグ村、バターヌーン村で調査したとき、この実験の伝播が村から村へという横のつながりによるのではなく、村の有力者グループと政府という反応の積み重ねとして個々に実験が拡散することが確かめら

れた。

(注3) シェイフ層等の村の有力者の意志を尊重し、いかにしてかれらを納得させるかが、この実験の施行にあたって、第1の問題であった。いわゆる農地改革の外にある村で、この実験を執行する農業協同組合委員会が有力家族によって主要な委員を占められている。ナワグ村でも、元村長M・ボルグが委員長であり、直接に6つのホードを管理している。訳者が面接したナワグ村委員会の有力者は、A・I・セイエマ(計量官・1フェッダン所有・3フェッダン小作)、A・M・M・ダルウィッシュ(ナショナル・ユニオン代表・2分の1フェッダン所有、2フェッダン小作)、M・G・オマル(組合書記・シェイフ・フル・バラード=長老、12.5フェッダン所有)、Z・I・Hファイド(棉花商、2フェッダン所有、3フェッダン小作)であった。バターヌーン村では最大の地主120フェッダンの所有者の息子が組合書記として実権をもっていた。

(注4) ホード(またはハウド)はblockと訳される場合があるが、元來basin irrigationのbasinに当たり、灌漑の単位でもあり、かつ農地税評価査定区劃でもある。ナワグ村のホードは、ほぼ次の図のとおりである。



ホードの面積は一定ではない。

(注5) 融資者とは、農地改革省・農業省と農業協同組合信用銀行の2系列を意味し、農業協同組合をそ

の末端の機関としているが、農協信用銀行は全国に23の支店と113の代理店(tawkil)を別にもっている。さらに16の「村の銀行」を設置して実験を行なっている。融資(肥料、農薬、種子の供給を主な内容とする)の回収率は100%ではない。返済率は、収穫期によって相違があり、平均して70%を下限とし98%を上限としている(1959年)。

(注6) M・ファウジ「ナワグ」英語版によれば、ナワグ村の農地所有分布は次表のとおりである。

その他に191フェッダン22キーラートのワクフ地がある。農地所有の単位が小さいのみならず、この零細所有がホードのなかで、あるいは他のホードに分散して幾筆にもわかれている。

所有単位 (フェッダン)	所有者数	面積		
		フェッダン	キーラート	サハム
30~50	2	76	16	19
20~30	2	46	18	4
10~20	7	84	5	22
8~10	7	68	12	11
6~8	1	6	5	22
5~6	3	15	21	13
4~5	8	37	1	12
3~4	11	38	8	14
2~3	31	73	11	4
1~2	167	227	4	15
1/2~1	678	602	1	1
1/2未満	668	285	8	14
計	1585	1562	0	7

(p.17)

1フェッダン=24キーラート=1エーカー

1キーラート=24サハム

農地所有の規模が零細化していると同時に、零細な所有地が各ホードに分散し、さらにホード内でも分散している。若干の例をあげると、次ページ左欄上の表とおりでである。

(注7) 村長のゲスト・ハウスである。村には他に有力家族や地区のゲスト・ハウスがある。

(注8) 1955年当時、ナワグ村の閾値は確安1俵3.5~4.15エジプト・ポンド(公定2.64エジプト・ポンド)、棉花種子(メヌーフィア種)1アルデップ8エジプト・ポンド(公定1.38エジプト・ポンド)であった。M. Fawzi, *Nawag*. p.20. 訳者の農地改革省での聞き取りによると、公定の20~30%高がふつうのことであった。

(注9) 所有者・保有者と併記されているが、この論文では用語を明確に使いわけていない。農業協同組合のサービスが、農家の経営面積を基準として行なわれているから、農協の農家毎台帳は所有と小作をふくむ経営面積を記載している。

(注10) どちらもホードの名称。

(注11) 生産コストの評価はきわめて困難である。農業協同組合信用銀行における訳者の聞き取り(1961年)では、綿作の場合の一般的水準としてフェッダン当た

所有者名	所有面積		ホード名
	F.	K. S.	
Ismâ'il Hefnawy	1	12	El Setah
		17	El Gorn
		8	El Dakl
		—	El Natour
		10	El Wistang
		6	El Rizzka
計	3	5	
Ahmad El Sayed El Seki		6	El Setah
		7	El Daky
		—	El Louk
		20	El Sharky
		10	El Natour
		10	El Khamsah
計	2	5	
Hamed El Sayd Zelika		6	El Setah
		12	El Natour
		12	El Wistany
		—	Sahl
		6	El Menshy
計	1	12	
Tagasa Noun		9	El Setah
		6	El Lokemy
		8	El Wistany
		12	El Wirity
		—	Sahl
		9	El Menshy

(Mahmoud Fawzy, Nawag (英語版) p. 29~33)

り,

- 生産高—72エジプト・ポンド
- 経営費—21.5エジプト・ポンド
- 農地税—3エジプト・ポンド (自作農)
- 小作料—15エジプト・ポンド (9カ月分)

ナワグ村の近辺にあるミンシャート・シーフ村における訳者の聞き取り (1960年) では、平均して

- 生産高—85エジプト・ポンド
- 経営費・農地税—40エジプト・ポンド

であった。1962年春から、農業省経済局生産コスト課がサンプル調査をはじめているからその成果が期待される。訳者のビヘーラ県ダマンフル近辺における聞き取りを付しておく (右欄上の表)。

(注12) 村における騒動の原因は、貧困と組合による生産物の徴収過大 (組合の成績をあげるため) のためにおこる盗みの他に、有力家族間の抗争がある。

(注13) 農業における社会主義の3原則として、「土地所有の付与」、「生産向上」、「分配の公正」があげられている。Statement made by Central Minister of Agriculture and Agrarian Reform, Sayed Marei at a Press Conference held by him at the Information Department (1961年5月6月)。

(注14) サイエッド・ソンボルは、カイスーニー経済相と親しいジャーナリストであるが、かれの経済問題の知識については人によって極端に評価がちがって

フェッダーン当たり綿花生産コスト・水準

		労賃の部分
耕 作 (3回)	227PT	(95PT)
	35PT	(15PT)
播 種	20PT	(20PT)
種 子	60PT	
堆 肥	300PT	
灌 漑 (8回)	296PT	(136PT)
肥 料 (全肥)	262PT	(12PT)
農 薬 (4回)	トクサフィン	400PT
	リンデン	320PT
	ティディオン	360PT
農 薬 散 布	180PT	(180PT)
除 草	200PT	(200PT)
採 取 (3回)	1.	240PT (240PT)
	2.	200PT (200PT)
	3.	120PT (120PT)
原 木 除 去	30PT	(30PT)
小作料もしくは農地税	2500PT	
	300PT	

小作の場合……57.50LE (11.48LE)

自 作……35.50LE

いる。

(注15) アル・アハラーム紙は、1961年5月7日号で農地改革特集を行ない、そのなかでこの「危惧」について注釈を行ない、「この輪作 (集団化) プランは、集団農場の一形態であり、したがって私的所有の尊重に反するものであるという噂」がひろまっているが、決して「ソヴェト式の集団農場でない」点を力説している。

(注16) ミサークは耕地にひいた水を溜めておく部分を示す。いわば耕地の一角にできる用水池である。バトゥーンは、耕地のなかで堆肥をつみあげておく部分を示す。ともにエジプト方言である。

(注17) バターヌーン村の所有分布は、訳者の聞き取りによれば次のとおりである。

土 地 所 有	所有者数
2フェッダーン以下	420
2 ~ 5	739
5 ~ 10	97
10 ~ 30	17
30	1
120	1

(注18) 当時の棉花作付面積は、1234フェッダーンである (アル・アハラーム紙、1961年5月6日号)。

(注19) この集団化=交換分合プランによって棉花作付が行なわれた農地の70%が、20フェッダーン以上の単位にまとめられている。

(注20) メヌーフィーア県カ65カ村については、まだナワグ村のような生産上昇があらわれていないという事である。

(アジア経済研究所調査研究第3部 中岡三益)